

樺太時代の荒澤勝太郎 —『樺太文学史』執筆の背景—

鈴木 仁*

Katsutaro Arasawa in the Karafuto Period
- On the Spiritual Background of Writing the Literary History of Karafuto

Jin SUZUKI*

はじめに

日本領時代の樺太で生まれ育った荒澤勝太郎は、戦後、北海道に引揚げ、釧路市を拠点に、地域の文化活動や自然保護活動に取り組んだ。晩年、この地で執筆した『樺太文学史』には、樺太を訪れた著名な作家だけではなく、自身や友人、文学関係者たちの創作活動も網羅し、領有から敗戦に至るまでの日本領時代の樺太における文化活動が集成されている。

外地における文化活動については、1993年に刊行された『岩波講座近代日本と植民地』第7巻「文化のなかの植民地」で特集されているが、台湾、朝鮮、満州が主題となり、編集委員の川村湊は「サハリンでの移住日本人による文学活動—いわゆる樺太文学」が「南洋文学」とともに「まったく触れられていない」¹ことを課題としている。その不足を補うように同書に添付された月報には、荒澤勝太郎による「敗戦と樺太文学」が掲載されており、当時を知る証言者としてだけではなく、研究者としても重要な役割を担っていたといえる。

戦後の荒澤の創作活動は、釧路市で執筆した出版物や同人誌であり、現在、釧路市中央図書館内に設けられている釧路文学館には、写真や著作が展示され事績を伝えている。また、荒澤が編集委員を務めていた文芸誌『釧路春秋』での二度の特集²や、北海道新聞文化賞を受賞した際には樺太時代も含めた詳細な年譜が作成されている。

しかし、作品別での評価では、自然に関する著作から荒澤が「釧路湿原の花研究家」³として知られていたのに比べ、『樺太文学史』については、荒澤自身が故郷への思いである「郷愁」を著作で解説していることもあり、執筆にかけた情熱への敬意に向けられている。

そのため本稿では、荒澤の個人史における作品としての位置づけを図るため、樺太での青年期に注目し、戦前と戦後の創作活動にある「郷愁」から、『樺太文

学史』に至る背景を考察したい。

なお、本稿で引用する荒澤の発言や感想は、主として当時発表された作品や記事を出典とし、後年の回想は補足的に使用する。また、引用文中のロシア人名などの表記は原文のとおりとし、注では、荒澤勝太郎の著者名は「荒澤」のみ、樺太日日新聞は『樺日』と略し、発行年は西暦のみの表記とする。

第1章 樺太時代

1. 生い立ち

荒澤勝太郎は1913(大正2)年4月15日、樺太の真岡町^{まおか}で魚屋を営む周蔵、トミの長男として誕生する。真岡町は樺太西海岸の中心都市であり、真岡港は小樽港を中継して日本海側の各港へと結ぶ樺太の玄関口であった。

父、荒沢周蔵は北海道古平町の出身で、雑貨屋に奉公し、1910年(明治43)に真岡支店へ転任し、得意先の親戚である秋田県出身の高橋トミと結婚した。勝太郎の誕生後、父は独立し小売店を開くが経営に失敗し、転職のため樺太西海岸の広地村^{ひろち}、泊居町^{とまりお}に移り、1921年(大正10)に真岡町に戻り魚屋を開く⁴。

3年生で真岡の小学校に転入した荒澤勝太郎は、後年、文芸誌『釧路春秋』に発表された「自伝的な樺太文芸史」⁵によると、小学校の図書室で児童文学に親しみ、国木田独步や夏目漱石を読むようになったという。6年生修了時に樺太庁大泊^{おほどまり}中学校と小樽商業学校を受験し、両校とも合格したものの不況の影響で学費を用意できず、入学を見送った。そのため、真岡第一尋常小学の高等科に進み、この時期にロシア文学と出会い「特にチェーホフの作品に惹かれていた」という。

1927(昭和2)年、荒澤はこの年、樺太で3番目の中学校として開校した真岡中学校に入学する。学校では3年次に上級生たちが創刊した口語短歌誌『街道』に誘わ

* 北海道大学大学院文学研究院専門研究員 Postdoctoral Researcher, Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University

¹ 川村湊「第七巻 まえがき」『岩波講座近代日本と植民地』第7巻「文化のなかの植民地」岩波書店,1993年,14頁。

² 市民文芸『釧路春秋』第30号(釧路文学団体協議会,1993年)に「特集 荒澤勝太郎の作品とその周辺」、同誌第34号(1995年)に「特集 荒澤勝太郎さんを偲ぶ」。

³ 『釧路春秋』の奥付に掲載された編集顧問荒澤勝太郎の肩書。

⁴ 荒澤「父の肖像 荒澤周蔵小伝」艸人舎,1983年。釧路市中央図書館所蔵。

⁵ 荒澤「自伝的な樺太文芸史」『釧路春秋』第20号,1983年,35~45頁。

れ、町内の歌人による口語短歌誌『凡流』にも参加している。口語短歌は、大正期から昭和にかけて盛んとなり、北海道・樺太では小樽新聞の記者であった歌人並木凡平の影響が強かった。

荒澤は文学活動や同窓会誌の編集で活躍するが、学生生活では「教科書の代りに文学書に溺れていたし、チエホフのいう「中学校は政府機関の魂の墓場だ」という言葉を記憶してしまっただけで、規則づくめで縛られていることに、大いに抵抗心をもやしていた」という。そのため、卒業直前に校長の瓜田友衛⁶から自宅に招かれたとき「説教されることを覚悟」していたが、瓜田校長とは「文化」というものは何か」という話題になり、そこで荒澤は新聞記者志望であることを打ち明けた⁷。

2. 樺太日日新聞社への入社

1932(昭和7)年2月、真岡中学校を卒業した荒澤は、真岡町近郊の多蘭泊^{たらんどまり}の水産試験場で講習生として働くが、すぐに瓜田友衛校長に呼び戻された。瓜田校長から樺太日日新聞社の社長太田鎮雄への紹介状を受け取った荒澤が、豊原町^{とよはら}の本社を訪ねると、すでに入社の内諾が出ており、即日採用された。同社には真岡中学校の同級生であった阿部悦郎が勤務しており、編集長の小林金蔵からは「長髪族がまた一人増えたよ」と社内で紹介されたという。荒澤は、小林から万葉集やレールモントフ(ロシア帝政時代の詩人・作家)を教わり、先輩記者とぶつかる批判精神を認められた⁸。

樺太日日新聞社は日刊紙『樺太日日新聞』(以下『樺日』)を1907(明治40)年8月に創刊し、紙面には樺太庁の公報欄が設けられ、樺太印刷合資会社も兼営する島内最大の新聞社であった。1930(昭和5)年には朝刊4頁で8,600部を発行し、荒澤が入社する前年の1931年12月には夕刊4頁の発行が始まった⁹。この新聞社で、荒澤は校正係を経て、教育やスポーツを担当する文化部記者となる。

荒澤や阿部が担当する学芸欄は、樺太での郷土研究を目的に企画された文献欄に始まる。『樺日』は政治・経済を主とした紙面のなか、内地での郷土教育・郷土研究の影響を受け、1929(昭和4)年9月21日に「樺太文献欄」が設置された。企画した同紙主筆の菱沼右一は、その理由を社説に「我等父であり母である者は

領有当時より子の時代に至るまでの様々の出来事の子に伝えておく義務がある、吾等の子孫が此島を郷里として此郷里を愛する時、必ずやこの郷里樺太の「正史」を編むものがあらはれるであらう¹⁰と掲げており、出身者となる第二世代への期待があった。

この欄では文献や郷土研究の報告が紹介され、翌1930年には、新聞記者や教職員による「樺太郷土会」が結成された。この団体により、アイヌ語の地名研究や遺跡の調査が行われ、博物館の整備や図書館の設立、史跡保存が樺太庁の政策に反映された。1932年、菱沼は退職し、東京で外地の政治・経済を専門とした新聞社「中央情報社」を起す。主導者である菱沼の退島を機に、樺太郷土会の活動はなくなるが、「樺太文献欄」は「樺日学芸欄」と改称し、教職員で組織された樺太教育会での郷土教育の研究成果が掲載され、その趣旨は受け継がれた。

1932(昭和7)年5月6日、「樺日学芸欄」内に「文芸欄」が新設される。荒澤と阿部が担当となり、初回は投稿の呼びかけとともに荒澤の「シナリオ 海港恋愛風景」「詩 手紙とその返事」が掲載され、翌日には阿部悦郎による「随想 心の足跡」が掲載された。

「文芸欄」は阿部・荒澤の人脈により、発言者を増やしていった。6月24日には「撃進する新短歌」の連載が始まり、定型口語短歌よりも型にとらわれない「自由律現代語歌」が、これからの新しい文学理論として紹介されている。翌25日掲載の阿部悦郎「用語韻律」では「歌を作る我々は現代人である。現代人が創作するに際して現代意識を持たぬ古典語を使用する時その創作者の現代意識との間に大きな溝渠を生ずる」と従来の短歌を批判しつつも、万葉集、古今和歌集などの「古い時代における歌」については、「その時代における確たる時代意識の象徴」として認めている。荒澤は連載第8回(7月3日)の「新興短歌のメカニズム—シュル・レアリスムの立場から—」で、「魂のないつまりポエジーの歪曲された短歌は疑似短歌である」と批判し「新興短歌における超現実主義」を提唱している。

阿部、荒澤たちによる「文芸欄」の編集方針には批判も多かったが、議論の活発化により島内の雑誌・同人誌で創作活動をする青年たちの交流が広がった。阿部、荒澤も新聞・雑誌に短歌や詩を発表しており、1933

⁶ 瓜田友衛は1886年に青森県に生まれ、広島高等師範学校博物学部卒業後、鹿児島、青森の中学校教諭を経て樺太に赴任し、1931年6月に真岡中学校の校長となる。生物学を専門とし樺太で発見されたマンモスの化石や貝類、甲殻類などの研究報告がある。

⁷ 荒澤「忘れ得ぬ人々③瓜田友衛先生」『樺連情報』第180号、社団法人全国樺太連盟(以下略)、1965年3月、3面。

⁸ 荒澤「忘れ得ぬ人々②小林金蔵さん」『樺連情報』第179号、1965年2月、3面。

⁹ 『日本新聞年鑑 昭和六年版』新聞研究所、1930年12月、現勢88頁。

¹⁰ 菱沼右一「社説 樺太文献欄設置」『樺日』1929年9月27日。菱沼の樺太での活動については、拙稿「樺太郷土会の活動とその影響—新聞・雑誌による郷土研究の取り組み—」『北方人文研究』第12号(北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター、2019年)にまとめた。

¹¹ 『短歌創造新鋭叢書第四篇 季節の手』(短歌創造社、1933年)国立国会図書館デジタルコレクション ID 000000641489。

荒澤の作品は11頁、阿部の作品は9頁にわたり掲載されている。

¹² 荒澤「暑中御見舞(二)東京から」『樺日』夕刊、1935年8月10日。

¹³ 荒澤「樺太文学の現状打診(六)局外者からみた樺太文学の現状」『樺日』1936年5月12日。

(昭和8)年には、短歌創造社(東京)から刊行された新鋭叢書第四篇『季節の手』に、二人の作品が掲載されている¹¹。

また、1934(昭和9)年11月には、文学仲間で結成した樺太詩人倶楽部から、合同詩集『樺太詩人抄 鴉』が出版された。同書には、荒澤、阿部(筆名逸見篤夫)、松野朔雄、黒木川霊など9人の作家が参加した。この時期、荒澤は東京で生活をしており、詩集には故郷真岡を詠んだ詩「海港の植物性」を発表している。これが、生涯を通して創作活動の主題となる「郷愁」の最初の作品となる。

3.東京から眺める樺太

1934(昭和9)年4月、21歳の荒澤は上京する。かつて『樺日』で主筆を務め、東京で中央情報社を営んでいる菱沼右一から、樺太日日新聞社に記者の派遣が申し込まれ、編集長の小林金蔵は荒澤を推薦した。荒澤は夜間大学への進学を条件に承諾し、中央情報社の記者となり、『樺日』へも東京から発信を続ける。なお、上京後は法政大学専門部に入学するが、病のため1936年に退学している。

樺太では樺太詩人倶楽部が分かれ、文学仲間たちは様々な文芸誌で作品を発表しているが、荒澤は東京で樺太への郷土意識を高めることになる。そのため『樺日』に掲載された荒澤の近況報告は、首都の文化を称えるよりも、「豊原に生活して海港真岡への郷愁に狂信的になったこの男が、今度はその二つとも、海を越えて離れ再び狂信的な郷愁の囚になりそうだ」¹²という憂いが綴られている。

しかし、荒澤は東京での生活から、樺太の文壇を論じる客観的な視点を得る。1936(昭和11)年5月12日付『樺日』に掲載された「局外者からみた樺太文学の現状」¹³では、「植民地文学といふものは、植民地を拓き、新しいモラルに生きたエスプリを高揚し、植民地に叫ぶものよつてなし得る文学」という考えから「樺太に住み、樺太の文化建設の仕事に従事しながら、文学を育てる意志に於いて、植民地文学が現はれて来る」と指摘している。この当時、元住民の伊藤富士雄¹⁴により、郷土樺太を舞台とした長編小説『村の人々』(第一書房、1932年)が中央の文壇で評価されていた。また、

大泊中学校出身の宮内寒彌¹⁵が『早稲田文学』に発表した「中央高地」が芥川賞候補作になり、創作活動に励む樺太の青年たちの話題となっていた。

だが、荒澤による彼らの評価は違った。宮内寒彌について荒澤は「氏は樺太にゐたこのとある作家というふだけでしかない」と指摘し、伊藤富士雄に対しても「何れは樺太に帰つて、文化的指導者として、啓蒙運動に努められる筈」と、東京で創作活動を続けていることに批判的であった。荒澤の評論の背景には「要するに樺太の文学即ち植民地文学は飽迄も、中央文壇と対立しそれを圧倒する新しい文学でなければならぬ」という考えがあった。なお、戦後の発言にも1973年の『釧路春秋』で企画された「座談会 地方文学とは何か」で「現地主義というものがあってその風土の中に根をおろして芽生え、そこで生活し、そのなかで血となり、肉となったものを言葉で構築して行くのが地方文学主義」¹⁶とあり、郷土文学に対する一貫した思いであった。

また、この時期に荒澤の自然文学が生まれている。登山とスキーを好んだ荒澤は、1935年2月に樺太の幌登岳の走破に挑戦するが、悪天候のため中止し、その遭難記を『樺日』に発表する¹⁷。同年3月6～10日には「山の爽情」を、翌1936年4月6～9日に「スキー雑記」連載している。同時期に『山と溪谷』(山と溪谷社)に樺太のスキー登山の案内も寄稿しており、1938(昭和13)年12月には、中央情報社から初の単著『粉雪の魅力 樺太のスキーと雪山』を出版している。同書は、樺太特有の粉雪(パウダースノー)について、スキー登山の案内だけでなく、雪とともに生活する人々の姿も描写しており、晩年まで書き続けた自然文学の端緒といえる。

荒澤の自然文学は、樺太の文学仲間にはなかった分野であり、友人の阿部悦郎も『粉雪の魅力』への書評で「文芸上では殆ど同じ途を歩いてきたしジャーナリストとしての出発も一緒だった(中略)しかしたつた一つ彼は私の知らない世界をもつてゐた。山岳人としてまたスキーヤーとしての荒澤勝太郎がそれである」と述べている¹⁸。

中央情報社の社長菱沼右一は、荒澤の文学的才能を認め、1930年に樺太郷土会で出版した『樺太の地名』の増補改訂版の編集を任せて、現況や観光情報を加えたガイドブックとして再販された¹⁹。前掲の『粉雪の魅力 樺太のスキーと雪山』も菱沼右一の支援で出

¹⁴ 伊藤富士雄は、1904年に北海道新十津川町で生まれた。翌年、警察官の父が樺太に赴任し、一家は西海岸多蘭内に移住する。大泊中学校に入学し、明治学院中学部に転入、1926年に同高等部を卒業した。小説『村の人々』は父をモデルに、開拓生活を描いた作品。初版は1932年に自費出版(発行所は白金文学会)され、出版社での再販を重ねた。職業作家にはならず、三菱重工に勤務し、2001年逝去。経歴は、村上文昭『藤村から始まる白金文学誌』(明治学院キリスト教研究所,2011年)109～110頁収録の「一作をまもり抜いた作家 伊藤富士雄」より。

¹⁵ 宮内寒彌(本名、池上子郎)は、1912年に岡山県で生まれた。父池上巳三郎が1923年に樺太庁中学校(1925年、樺太庁大泊中学校に改称)の教員となり、一家は移住する。大泊中学校卒業後、1930年に早稲田大学附属第二高等学院を経て、1932年に早稲田大学文学部に入学する。1935年8月の『早稲田文学』に、大泊町を舞台に白系ロシア人を描いた小説「中央高地」発表し、翌1936年3月に第2回芥川賞の候補作となった。1938年に小説集『中央高地』(砂子屋書房)を刊行し、作家となる。1983年逝去。経歴は『宮内寒彌小説集成 全一卷』(作品社,1985年)より。

¹⁶ 「座談会 地方文学とは何か 小松伸六氏を囲んで」『釧路春秋』,1973年11月。なお、この座談会で荒澤は創作における「地方」や「風土」の重要性を問うが議論に展開されず、話題は地方の文学活動と中央とのつながりに移る。

¹⁷ 荒澤「山に敗北する」『樺日』1935年2月23日。

版されており、序文を執筆した当時の樺太庁長官棟居俊一（次節で解説）は、荒澤を「樺太に生まれ、樺太に育って、意識と体験との生活を通じてその魅力を誰にも優って、しっかりと掴んである著者」と紹介している。出版を機に、荒澤は棟居長官との交流を深め、東京では文学座や築地小劇場の鑑賞に同行し、視野を広げられたという²⁰。棟居長官との出会いは、荒澤を再び樺太へと導くことになる。

4.文化の時代

樺太では北海道のような長期の拓殖計画が実施されず、その策定は歴代長官の課題となっていた。それまで樺太では内地の府県知事と同じく、政権交代の度に長官が更迭されていたが、1932年に樺太庁長官に就任した今村武志は「樺太拓殖十五箇年計画」を企画し、拓務大臣主宰による樺太拓殖委員会の審議を経て、1934（昭和9）年に実施され、安定した発展が計画されていた。

しかし、実施4年目の1937（昭和12）年7月に日中戦争が始まり、樺太の開発事業は、戦時体制を支える石炭資源の供給地としての役割となった。荒澤は雑誌『樺太』（樺太社）に寄稿した論説で、昭和13年度の樺太庁の予算案が議会で質疑もなく通ったことから、資源にしか注目されない樺太への認識の低さを問題視し、住民により「立ち遅れ否放任されている樺太の文化を建設しなければならない」と訴えている²¹。

阿部悦郎もまた、1935年に樺太庁が新聞・雑誌への「一大弾圧」「ダニ狩」により民意を抑制し、1937年に設置された樺太庁評議会も官選議員による長官諮問機関に止まったことに「強権政治の権化として島民の不評を買った」と批判している²²。この当時、樺太出身の第二世代が社会の担い手となりつつあり、樺太詩人倶楽部の同人などが新聞・雑誌の書き手となって、樺太庁の政策を論じるようになっていた。

1938（昭和13）年5月7日、樺太庁長官に拓務省管理局長を務めていた棟居俊一が就任する。29日に赴任した棟居は『樺日』の取材に、「出来るだけ明朗に愉快に住み良い樺太を建設するために努力しようと思つて居る」²³と抱負を語り、雑誌『樺太』でも「うるおいのある独自の文化」「地方色に富む郷土芸術のレベルを高めてゆきたい」と述べている²⁴。

10月、樺太庁の諮問機関である樺太臨時時局対策

委員会の特別委員会に文化部も設けられ、翌1939（昭和14）年6月1日には、文化部の人員をもとに、樺太文化振興会が設立される。その設立趣意書では、樺太での「東亜寒帯諸国民ヲ誘導スルニ足ル独自ノ日本ヲ創造」する必要性が掲げられ、住民には「日本寒帯文化建設ヲ目標トスル島民ノ創造的活動」が求められた²⁵。会の事務所は樺太庁長官官房に新設された企画課に置かれ、樺太庁長官の会長職をはじめ、樺太庁幹部が役職に就いた。専任職である会の事務には、荒澤勝太郎が樺太庁の企画課に入り担当した。中央情報社社長菱沼右一は、棟居長官の要請を受けて荒澤を樺太庁に送ったという²⁶。

棟居長官について、阿部悦郎は「文化の恵み薄き北方の凍土に、新亜寒帯文化の花を咲かしめんことに、異常な熱意をこの新長官は抱いてゐる」²⁷と期待し、荒澤たち青年層は「旗幟を同くする施政方針を掲げる長官に「文化長官」というニック・ネームを捧げた」という²⁸。

樺太文化振興会は農村や市街地の住宅改良、島産品を使った栄養講習会、図書館や修養施設を助成する生活面の改善事業と、樺太叢書の刊行や教員の研究活動への奨励金の交付など学術的な事業への支援が行なわれた²⁹。

出版事業である樺太叢書では、新書版の形態や装丁を棟居長官が自ら当るなど、特に力を入れており³⁰、各巻の中表紙裏に掲載された刊行趣旨には「亜寒帯領域の有つ特異なる風土的環境の種々相と、日本民族の北方発展の進程に於ける本島独自の事蹟等とを汎く紹介することを主旨」と明記されている。執筆は樺太在住の有識者が担当し、自然科学系の内容が多い中、荒澤たち文学青年が待ち望んだチェーホフの樺太での旅行記も翻訳されている。

1890年にロシア帝国領時代のサハリン（樺太）を訪れたチェーホフの著作Остров Сахалинのうち、旅行記である前半部（第1章から14章）が、樺太庁のロシア語通訳太宰俊夫の翻訳と「棟居長官自ら多忙な時間を割いて校閲」³¹により、叢書第2巻の『サガレン紀行抄』として刊行される。流刑囚の生活を記録した後半部（第15章から13章）も太宰俊夫により翻訳され、1941（昭和16）年12月に、叢書第7巻『サガレン島』として刊行される。前半の旅行記部分の翻訳は以前にもあったが、この樺太叢書2冊により、初めて日本語での

¹⁸ 阿部夷地雄（阿部悦郎の筆名）「粉雪の魅力」『ポドゾル』第3巻第2号、ポドゾル社、1939年2月、30頁。

¹⁹ 菱沼右一『樺太地名の旅』中央情報社、1938年。菱沼による「自序」には「本来から云へば荒澤君と共著と云ふても好い程努力を傾けて呉れた」とある。

²⁰ 荒澤「忘れ得ぬ人々⑨棟居俊一長官」『樺連情報』第188号、1965年1月、3面。

²¹ 荒澤「戦時議会見聞記」『樺太』第11巻第5号、樺太社、1938年5月、82頁。

²² 阿部夷地雄（阿部悦郎の筆名）「忘れられた樺太」『セルパン』（Le serpent）94号、東京・第一書房、1938年11月、82頁。

²³ 棟居俊一「明朗に愉快に住み良い樺太建設へ」『樺日』1938年5月31日夕刊。

²⁴ 棟居俊一「偶感二三」『樺太』第10巻第7号、樺太社、1938年7月、21～22頁。

²⁵ 「樺太文化振興会 趣意書」『樺太時報』第36号、樺太庁、1940年4月、54～56頁。

²⁶ 前掲、荒澤「忘れ得ぬ人々⑨棟居俊一長官」『樺連情報』第188号、1965年1月、3面。

²⁷ 前掲、阿部夷地雄（阿部悦郎の筆名）「忘れられた樺太」『セルパン』94号、第一書房、1938年11月、82頁。

全訳が揃った。樺太の文学青年にとって、郷土樺太にかつてチェーホフが訪れていたことの影響は大きく、阿部悦男は「[サガレン島]と云ふ土地との血縁的つながりに於て、我々がチェーホフから、その遺産の一部をでも継承したい」という意識であったという³²。

後年、荒澤は『樺太文学史』で棟居長官のこれらの政策を「文化・教養・産業・政治どれも同じレベルで受止め、その芽生えを探索した。こういうことは再領有後、かつてこの島にあったらうか。もちろんあり得なかった」と評価し、戦時下であったが、この時期を「従来の様相を一変させた島の行政に「文化」という問題をテーマとして取上げられた明るい時」と回顧している³³。

しかし、棟居の文化政策は、1940(昭和15)年4月9日の樺太庁長官退任により終息する。棟居長官は、拓務省と樺太の石炭開発政策をめぐって対立したため、拓務省人事の刷新により退任させられた。

荒澤は、後任の「小河長官が赴任すると、樺太文化の声は忘れられたやうにピタリと鳴りを鎮めた。棟居前長官の時代には、役所の属僚たちですら、したり顔で「文化」論議を吐き散らしてみたものである」³⁴と、長官に追従する役所内の変化を感じた。6月には樺太庁を退職し、民間の出版社である樺太社に転職し、雑誌『樺太』の編集長を務める。

その後も樺太文化振興会の活動は継続されたが、刊行物の販売が主な業務となり、組織として文化運動の発信は行わなくなった。荒澤は、かつての職場を「今のまゝでは、島民は文化生活に於いてどうでも勝手にし給えといふ無責任極まりない状態だ。少し強い言葉で言へば、「文化振興会よ、恥を知れ」と言ひたいのだ」と批判している³⁵。

1941(昭和16)年4月に、樺太の翼賛会組織として、樺太国民奉公会が結成され、住民への生活指導を提唱する。荒澤は文学仲間を中心とした青年層の意見として、1943年1月の雑誌『樺太』に座談会「若き世代の文化観」を発表する³⁶。荒澤が司会を務めるこの会合では「奉公会の遠藤部長に文化問題を訊ねたところ、文化は戦争がすんでからだ、出稼人の島に文化はないと云った」(出席者齋藤隆介の発言)ことから、樺太の「出稼文化」の捉え方が主題となった。

同じ移住地である北海道との比較では、木村慶一の「北海道は、入つて来た人は生きるために労作した。樺

太の場合はさうではなかつた樺太の土に生きるためではなく、別なもののために労作が営まれた」、松野朔雄の「パルプのために鉄道を作り、石炭のために港湾を作る、といふのが樺太の実情」、新庄成吉の「運命的に出稼地になるやうに出来てゐる」という自嘲的な意見に対し、荒澤は「パルプ工業といふものは技術的に見て最高度の技術文化でありながら、何故文化が他の面で遅々とした進歩もない状態を続けてゐるか」と、樺太に導入されている工業技術を事例に、遠隔地を理由とした文化の後進性を否定し鼓舞した提議をしている。ただし、組織活動については、荒澤は大政翼賛会の文化部長に劇作家の岸田國士が就任したものの樺太では「奉公会や長官が、考へをそこまでに持つて行つて呉れるか、どうか現状は悲観すべき状態」と述べている。

5. 戦中・戦後の別離

樺太で長官主導による文化政策の時代を迎えていた頃、荒澤の友人阿部悦郎が逝去する。阿部は1914(大正3)年9月5日に真岡町に生まれた。1927(昭和2)年に真岡中学校に入学し、高等科を経て入学した2歳年上の荒澤と同級生になるが、病気がちで休学が続いたため3年次で退学した。義父が樺太日日新聞社の真岡支局長だったことから、回復後の1932年に同社に入社する。同年に荒澤も入社し、前述したように「文芸欄」を担当し、創作活動では島内外の文芸誌に、短歌、詩、小説を発表した。

阿部は、会話形式で樺太を紹介する『樺太の旅』を執筆し、1935年に樺太日日新聞社代理部から出版する。樺太の地理、風土、産業の情報が紀行文と合わせて綴られており、翌年、改訂再版が樺太時事新聞支社から出版されている。

同書では、阿部や荒澤が敬愛するチェーホフについて、案内役の登場人物に次のように語らせている³⁷。

僕がチェーホフを愛する理由がある。それはサガレン紀行だ。我々がいま住んでゐるところの樺太を、ものゝ本に依れば際だって碧かつたと云ふ、その愛情溢るゝ眼でどんな風に見たか、どんな風に感じたか、それを考へることは逆も楽しいのだ。古さびれたウラヂミロフカの街を歩いてみると、背の丸いチェーホフが、手をうしろに組んで、そこらへんの傾家のかげか

³² 荒澤『樺太文学史』第Ⅲ巻、艸人舎、1987年、400頁。

³³ 井出瑞穂「樺太文化振興会」『樺太時報』第36号、樺太庁、1940年4月、53～64頁。なお、棟居長官期の文化政策については、拙稿「樺太庁による文化政策の展開—棟居俊一長官と樺太文化振興会—」『北方人文研究』第14号(2021年)にまとめた。

³⁴ 「樺太探検時代 文化叢書近く刊行」『樺日』1939年4月27日。

³⁵ 「文化叢書サガレン紀行刊行される」『樺日』1939年12月8日夕刊。

³⁶ 阿部悦郎「チェーホフの眼」『樺太時報』第40号、樺太庁、1940年8月、65頁。

³⁷ 荒澤『樺太文学史』第Ⅲ巻、艸人舎、1988年、400頁。

³⁸ 荒澤「(文化時評) 樺太文化の貧相」『樺太』第10巻第8号、樺太社、1940年8月、32頁。

³⁹ 前掲、荒澤「(文化時評) 樺太文化の貧相」『樺太』第10巻第8号、33頁。

⁴⁰ 「若き世代の文化観(座談会)」『樺太』第14巻第1号、樺太社、1942年1月、124～134頁。

ら「おゝ今日は」とでも云つて出て来さうな気がする。……どうだね、君、愉しいことぢやないか。その彼がサガレンの旅を思ひたつたのも、やさしい心の発露にほかならないのだ。

チェーホフをはじめとするロシア文学の影響は阿部の創作にも表れており、『月刊ロシヤ』第2巻第1号(日蘇通信社、1936年1月)に発表された短編「エリーナ 樺太攻略戦挿話」では、日露戦争の樺太戦で家族を失うロシア人を主人公に描くなど、樺太のロシア人を登場させた作品を発表している。

しかし、阿部は結核にかかり、1938(昭和13)年12月に療養のため上京する。この時、荒澤も東京で記者生活を送っており、衰弱していく阿部に付き添う。病床の阿部に荒澤は次のように告げている³⁸。

私は彼に健康を取り戻したら、創生時代ともいふべき樺太の文化の過程を、史的な文章に纏めることを奨めた「樺太文化小史」と題してもいゝぢやないか」と語つた。其仕事は難事業であることは容易に認められたが、有意義だと彼も賛同した。(中略)その仕事によつて樺太を哲学することが出来る。さうすれば彼の作品にも、もつと逞しい樺太の生き方が現はれてくることを私は信じてゐた。

しかし、病状は回復せず、阿部は1939年3月、樺太に帰る。7月6日付で出された荒澤への最後の葉書には「自分が生まれそして成長して来たこの島の自然をもういつべんしみじみと身にしてみるまでみたいなどこの頃考える」³⁹と綴り、この2ヶ月後の9月5日に阿部は逝去する。文芸誌に掲載する追悼文を10月15日に書き終えた荒澤は、末尾に「眼をつぶれば忽然と彼が私の前に現はれる。そして言ふ。自分達が生まれそして成長して来たこの島の自然をもういつべんしみじみと身にしてみるまでみたい」と阿部の最後の言葉に重ねて結んでいる⁴⁰。

樺太庁の嘱託職員になったこの時期に、荒澤は帰郷した樺太で家庭を築く。1940(昭和15)年4月に、東京で出会った岡山県出身の頃末耶栄子と結婚し、翌年4月に長男が生まれる。樺太庁退職後、編集長となった雑誌『樺太』では「荒木大二郎」「青柳十九郎」「宮内三郎」「近藤周平」の筆名も使い執筆し、政治評論では検閲による削除も受けている。

太平洋戦争開戦の翌1942(昭和17)年1月、雑誌『樺太』は樺太庁の広報誌『樺太時報』と合併し、『北方日本』と改題される。かつての職場であった中央情報社も北方日本社に吸収されて東京支社となり、荒澤は引き続き『北方日本』の編集長を務める。

1943(昭和18)年9月、30歳の荒澤は、海軍に応召され、衛生兵曹として大湊基地(青森県)の医務課に配属される。翌年、長女菊が誕生するが、その直後に荒澤の母親が逝去する。荒澤は一週間の帰郷が許され豊原市に戻り、家族との再会を果たすが、これが荒澤にとって最後の樺太での時間となった。その後、横須賀海軍病院、山陰航空隊、鹿児島鹿屋、鳥取県米子の美保基地(第八〇一海軍航空隊医務科)に転属し、1945年8月15日の終戦となる。

しかし、樺太では8月9日にソ連軍が侵攻し、15日以降も戦闘は続いていた。除隊した荒澤は北海道に向かったが、この時の心境を後年、次のように回想している。

樺太は私の生れ故郷である。誰がなんといつても、この事実を、ひっくり返すことは出来ないのだ。戦前、戦後を通じて、この私の独白は少しも変わっていない。特に終戦直後、山陰地方の航空隊から解放されはしたものの、帰る途をせかれ、はるかに樺太を思つて、悶々打ちひしがれたような境遇にあったときは、その独白はもっとも強く、私は気が狂いそうであった⁴¹。

樺太での戦闘は8月22日に停戦し、ソ連軍による占領統治が始まる。荒澤は稚内で樺太への逆密航(樺太から北海道へ脱出する密航とは逆に、ソ連軍の監視を避けて樺太に上陸すること)の機会を待った。後年、稚内を訪れた荒澤は「私は終戦の年の九月、あのローマの遺跡のような円柱の並んだドーム形の棧橋の混乱のなかで呆然とした」と回想している。真岡町にいた病身の妹は、ソ連軍侵攻直後の緊急疎開で引揚げてきたが、小樽の療養所でその逝去をみとる⁴²。

豊原市にいた荒澤の家族(妻、長男、長女、荒澤の父)は、ソ連軍の占領下で生活する⁴³。その間の1945年9月に長女菊を亡くしており、翌1946年4月に密航で脱出した友人から知らされる。この時、ソ連軍による言論人への検挙対象に荒澤の名もあることが伝えられ、逆密航

³⁷ 阿部悦郎『樺太の旅』樺太日々新聞社代理部、1935年、38頁。

³⁸ 荒澤「阿部悦郎の想ひ出話⑤」『樺日』1939年9月16日。

³⁹ 荒澤「阿部悦郎に就いての断片」『ポドゾル』第3巻第11号、ポドゾル社、1939年11月、30頁。

⁴⁰ 前掲、荒澤「阿部悦郎に就いての断片」『ポドゾル』第3巻第11号、1939年1月、32頁。

⁴¹ 荒澤『郷愁通信』、やち坊主同人会、1963年、59頁。

⁴² 荒澤『北海道ハマナスの旅』北海道新聞社、1978年、220頁。稚内海岸での回想では「亡妹は真岡郵便局の交換手であった。胸を患っていて欠勤していた。『九人の乙女像』の中には同僚もいる。健康であつたら彼女たちと同じ運命をたどつたかもしれない」とある。

⁴³ ソ連軍占領下での生活について、耶栄子夫人の体験談が荒澤『郷愁通信』(やち坊主同人会、1963年)95～100頁に「妻の眼」として収録されている。

の計画は断念するが、この年12月に樺太から家族が引揚げることができ、再会を果たした。

第2章 北海道での活動

1. 釧路での生活

荒澤は1947(昭和22)年4月に札幌市役所内にある北海道全市職員組合連合会事務局嘱託となる。札幌でも文芸誌『北針』(北針社)を発行し、道内の作家とともに創作活動を再開している。

1949年11月には、釧路市に本社を置く東北北海道新聞社に入社し、報道部長となる。翌1950年9月15日に釧路商工会議所業務課長に転職し、釧路青年会議所の設立に携わる。荒澤の企画力は、当時、釧路市役所の助役をしていた山本武雄⁴⁴が注目し、山本が1957年10月に釧路市長に就任すると、荒澤は市役所への転職を勧められる⁴⁵。

1958(昭和33)年4月、45歳の荒澤は、釧路市役所に転職し、市民課長となる。戦後の釧路市は、引揚者や道内移住者により都市機能が急速に拡大し、新設された市民課は、生活文化に関する事業を担当していた。荒澤によると山本武雄の市政は、「釧路市民憲章の制定」「花いっぱい運動」など「ロマンの結実」が表されていたという⁴⁶。

これらの政策には荒澤の樺太庁企画課・樺太文化振興会の経験も生かされており、1960年に釧路市が出版する釧路叢書の創刊では、樺太叢書を事例に「私は棟居さんのアイデアをかりて、数年前「釧路叢書」の刊行を釧路市長に持ちこんだ」という⁴⁷。

その後、釧路市経済部長、釧路市議会事務局長を歴任し、1975(昭和50)年の定年退職まで勤める。その間、鳥居省三主宰の北海同人会に参加し、1960年11月には、同人誌『やち坊主』を創刊し、1963年4月には、戦後に発表した文章を収録した『郷愁通信』を刊行している。荒澤が再び執筆活動を始めた背景には、釧路の町が明治期から文芸が盛んであり、戦後も市民に文化活動として受け継がれてきたことがあげられる⁴⁸。1972年には、荒澤は釧路文学団体協議会の会長に選任された。

『郷愁通信』の刊行以降、荒澤は地域の出版社や自費出版により、植物誌など自然を主題にした本を出し続ける。荒澤は、釧路をはじめとする北海道の自然に、樺太への「郷愁」を重ねており、1964年に、樺太からの

引揚者で結成された社団法人全国樺太連盟の機関紙に次のように述べている⁴⁹。

北海道といっても特に私の住んでいる東北道の釧路地方は自然環境が実に樺太に似ている。強いて説明すれば西海岸の真岡・野田・名寄附近と幌内平野のツンドラ地域を組み合わせたようなものではないかと思う。気の合った連中と酒でも呑んで談笑している時など、相手をびっくりさせるようなことがままある。札幌を豊原といってみたり、釧路を真岡といってみたり、原野をツンドラ地帯といったりするからである。

樺太を連想させる原野(湿原)については、1970年発行の『随筆 花の釧路湿原』の巻頭に掲載された詩「郷愁湿原」にも、「そこはもう私の故郷なのだ／喪失した故郷はここによりみがえっているのだ。／チェーホフ的湿原だ」と詠んでおり、故郷を連想させる風景であった⁵⁰。

2. サハリン再訪

1965年11月、釧路市長に山口哲夫が就任する。山口は1928年に真岡町で生まれ、豊原中学校を卒業し、大泊町役場に勤め、引揚げ後は釧路市役所に勤務していた⁵¹。社会黨員であった山口市長は、ソ連との友好関係を深め、自治体職員の派遣やサハリン州ホルムスク市との姉妹都市の提携を進める。ホルムスク市は、山口と荒澤の故郷であるかつての真岡町であった。そのため、ソ連との交流は、荒澤を故郷へと向き合わせることになる。

1972(昭和47)年4月、自治行政視察団に参加した荒澤は、モスクワ、レニングラード、エストニアのタリン市を訪れる。特別にモスクワの修道院にあるチェーホフ、ゲーリキの墓碑見学を許可された荒澤は、チェーホフの墓の前に、かつての樺太の青年たちの思いを次のように回想している⁵²。

この島を「人間の住む土地」にしなければならない。「呪いの土地」でもなく「この世の地獄であってはいけないことを、チェーホフから教えられたからである。それを日本的に具体化しようと努力したのである

⁴⁴ 山本武雄は秋田県出身で、1930年に釧路市役所に勤務した。1931年頃から『釧路新聞』の文芸欄「木曜文芸」で活躍し、1938年には新興俳句運動として提唱した「風流抹殺論」が新旧派の論争に発展した創作歴を持つ「文人市長」であった。追悼号となった『釧路春秋』第18号(1981年11月)を参照。

⁴⁵ 荒澤「山本武雄さん追悼」『釧路春秋』第18号,1981年11月,9～15頁。

⁴⁶ 前掲、荒澤「山本武雄さん追悼」『釧路春秋』第18号,11～12頁。

⁴⁷ 荒澤「棟居俊一長官」『樺連情報』第188号,社団法人全国樺太連盟,1965年11月,3頁。

⁴⁸ 釧路地方史研究会編『釧路叢書 26 戦後史ノート(上)～二〇万都市・釧路の成立～』釧路市,2002年,7～8頁参照。

⁴⁹ 荒澤「随想 花と郷愁」『樺連情報』第168号,社団法人全国樺太連盟,1964年2月。

⁵⁰ 荒澤「随筆 花の釧路湿原」やち坊主同人会,1970年,2頁。

1973(昭和48)年8月22日、60歳の荒澤は、サハリン墓参団・友好親善代表団に参加し、母と娘の慰霊と、山口釧路市長からホルムスク市長への招待状を渡す親善の役目も担い、ソ連領となったサハリン(樺太)を訪問する。荒澤は翌1974年にも、この事業に参加し、9月21日にサハリンを訪れているが、最初の訪問は「とにかく「サハリンの現実」と「心のふるさと」の闘い」⁵³になったという。

サハリン訪問の感想は、最初に『季刊北方圏』第5号(北海道国際交流・協力総合センター、1973年10月、114～118頁)に「見て来たサハリンの生活」として発表された。冒頭に「サハリンにはツァーリ時代の流刑の島のイメージはとうに消滅している。それは日本領時代に果たされた。その日本的色彩も体臭も同じように消滅している」とあり、故郷への懐古ではなく、社会主義国の一般人の生活を報告した内容になっている。

その代わりに文芸誌『釧路春秋』では、2回にわたり心情を綴った紀行文が掲載された⁵⁴。1975年には、それらをまとめ、追記がなされた『遙かなるサハリン故郷喪失者のふるさと紀行』が樺太庁真岡中学校・高等女学校同窓会釧路支部から発行されている(以下の引用では『紀行』と略す)。

1973年の訪問では、荒澤は「私は樺太の終戦時の混乱は知らない。そのことが幸せというべきなのか、それとも不幸なのか、私にはわからない。苦しみを知らないだけに、甘い感傷があるといえるかもしれない」という複雑な心境を抱えていたが、海上からホルムスク(真岡)の市街を目にすると「異国風の街並みが、私の郷愁のイメージを完全にくつがえしてしまった」という(『紀行』12頁)。

上陸後も30年ぶりに訪れた故郷を歩く荒澤は、この地がすでに「異国の、それでいて微塵も昔日の面影を残そうとはしない、様相一変した街並み」になり、「故郷的な表情も言葉もない」ことに動揺し「感傷すらも入りこむ余地のない現実の厳しさにたじろぐばかりであった」という(『紀行』4頁)。

そのため荒澤は自身を「好奇心をもやした観光客」とし「北風風の街や人を見よう」と決意したが、それでも視線は「思い出をよみがえらせるものをさがし求め」続けていた(『紀行』19頁)。

ホルムスク市長に招待状を渡し、公的な役割を果たした荒澤は、「この時、私は個人的な回想を中心にした偏狭な気持を捨てた。回想の主題となるものがほとんど消滅した今となって、何の感傷か、何が郷愁か」(『紀

行』22頁)と自らに言い聞かせた。しかし、船上に戻り、再び海上から眺めた町並に、荒澤は1934年の合同詩集『樺太詩人抄 鴉』で発表した自作の詩「海港の植物性」を思い出す。

そう言えば私はこの街で生まれて、もっとも感受性の強い時に、この街で育ったのに、海から、このように生まれた街をしみじみと見た記憶のないのに気がついた。

それにしても、美しい港街だ。私はこの街を「海港」と妙に気取って呼んだことを思い出すのであった。この言葉が好きで、私は詩を書いたことがあった。昭和八年か九年のことであった。(中略)驚ろいたことに、私が船上から見た港街に感じた詩情とは大きな変化はなかったことである。言葉を換えて言えば、昭和八年以来、詩情は成長をとめてしまったということなのだろう。それとも、私には生れ故郷を精神的に見棄てる理由はどこにもなかったといえるのかもしれない。(『紀行』55～56頁)

ユジノサハリンスクと名を変えたかつての豊原の町も、荒澤の知る風景ではなくなっていた。そのため荒澤は「ポケットにしるばせて来た「宮沢賢治詩集」をひもといて、私は新しいサハリンの首都のパノラマに、親近感を示そうとはしない」ことを「心の支え」としていたという⁵⁵。荒澤は、この訪問を通して、サハリンでは失われた樺太の風景が、文学のなかにあることに気づく。

また、荒澤は個人の葛藤だけではなく、サハリンに残留した人々へも目を向けている。例えば、戦前の荒澤の文学には描かれていなかった朝鮮民族について、次の会偶を記している。

私は街角で一人の朝鮮人に会った。立止って私をしげしげと見ている。近づいて話しかけると日本語が通じる。戦争以前から住んでいたという。私もこの近くに住んでいたことがあるという、彼の表情はいくらかゆるんだようだったが、それはほんの僅かな時間で、再び陰うつな顔に変わった。

「国へ帰りたいが、日本が戦争で敗けたからだめだ」とぼつりとつぶやいた。南か北かは判然としない。年は六〇才だという。私と同年代である。子どももいるだろう。

「年もとったし」とぼつりという彼の目はハンチング風の帽子のひさしのかげ、でわびしく光った。(『紀行』158頁)

⁵¹ 山口哲夫(1928 - 2020)については、著書『革新市長一年生』(三一書房、1967年)、『信念は曲げず』(北海道新聞社出版局、2008年)参照。荒澤勝太郎と山口哲夫は、共に真岡町の出身で釧路市役所に勤めているが、荒澤の著作から親交は確認できなかった。市長選挙では、前市長山本武雄の指名した後継者で、やち坊主同人会の仲間が対立候補になっており、交友関係が重ならなかったであろう。

⁵² 荒澤「チェーホフの墓碑とその周辺」『釧路春秋』第17号、1980年、36頁。

⁵³ 荒澤『遙かなるサハリン 故郷喪失者のふるさと紀行』樺太庁真岡中学校・高等女学校同窓会釧路支部、1975年、310頁。

また、参加者の会話から、戦争により引き裂かれたある家族の複雑な心境も知る。

「サハリンへ来る機会があれば、なんとかして、毎年来るようにしたい。おっ母さんも連れて来る。」
という弟に、姉はふっと淋しさを覚えた。そしてそれが怒りに変っていった。

「そういうことは、私に日本へ来るなということなのか」
激しい叱責であった。横っ面にビンタをくったようなものであった。そういう意味で言ったのではないにしても、姉にしてみれば、自分の里帰りをおさえるような冷めたい言葉に受けとれたのであろう。（『紀行』246頁）

1973年の訪問では、「『ソ連の国境観光』のよう気持で参加したのではないか」と思われる参加者もあり、「サハリンに来て敗戦を実感として受け止めた」という感想に対して「私はその言葉に激しい抵抗と憤りを感じ最終的には軽蔑の念」を抱いたという。荒澤はその理由について、自分や出身者たちには「敗北感と郷愁がダブって」おり、「ある意味では最大の戦争被害者たちであり、敗戦の恐怖のドン底まで突き落とされた」世代であることから「『樺太』とは無縁の人間」と対比させているが、憤りと軽侮の理由を詳細に説きながらも判然としない文章となった（『紀行』263～264頁）。最初の訪問で自身が「終戦時の混乱は知らない」がために「甘い感傷」を抱いていたことへの複雑な心境を反映しているであろう。

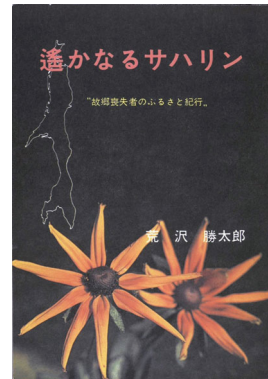
そして、この訪問の最終日で、荒澤はロシア領サハリンとの別れを次のように決意する。

私は遠去かるホルムスクの街を船尾に立って眺めながら、「ダ スヴェダーニヤ」と叫べんだ。これは絶望の叫びであるかもしれないが、絶縁の宣言ではない。

故郷を失った六十才の男の愚かな悲鳴であったかもしれない。「さよなら」といおう。これは一九七四年九月二十六日十九時四十分のホルムスク沖の船中での、記憶すべき私の平凡な言葉だった。（『紀行』306～307頁）

1975年、サハリン訪問記をまとめた『遙かなるサハリン故郷喪失者のふるさと紀行』が発行された。表紙には反転した樺太・サハリン島と、中央に大きくアラゲハン

ゴンソウが2輪、デザインされている。表紙裏に記載された解説では、この花はユジノサハリンスク市庁舎横の花壇に咲いていたのを撮影したとあるが、ハンゴン（反魂）の名前には「死者の魂を呼びもどす」という意味がある。



3.『樺太文学史』の執筆

荒澤が『樺太文学史』の執筆を構想した時期は不明だが、1960年代には、かつての文学仲間から当時の回想を手紙で求めていることから、サハリン再訪前からもその思いはあったのだろう。1964年には、鳥居省三により、釧路叢書第6巻『釧路文学運動史 明治・大正編』が刊行されており、1978（昭和53）年には、著者の鳥居自身や荒澤も登場する第19巻『戦後編』が刊行された。新聞・雑誌に記録された戦前の同人活動の発掘や、著者の経験も含めた地域文学史の編纂は、荒澤の構想にも影響したと考えられる。

荒澤の『樺太文学史』以前に、樺太の文学史をまとめたものは、短歌について樺太歌人会で幹事だった石川澄水により、1971（昭和46）年に発行された『北海道歌壇史』（北海道歌人会）収録の「樺太歌壇」（427～442頁）がある。石川は、1922（大正11）年に結成された真岡短歌会を草分けとした移住者（第一世代）による文芸活動を中心にまとめているが、荒澤たち青年層から評価を受けていた雑誌『樺太』記者山野井洋の短歌集『わが亜寒帯』（樺太社、1936年）を「当時関係者から推奨されていたようだが、芸術的香韻ある歌集とは全然趣が異って」⁵⁶と理解が及ばず、荒澤ら第二世代の参加があった口語短歌の活動についても追記で「歌壇という処までは行かない」と紹介する程度に止めている。そのため、伝統的な短歌を対象とした通史となり、世代間の認識の違いが表れた書き方をしている⁵⁷。

俳句については、菊地滴翠による『樺太の俳句』（北

⁵⁴ 荒澤「故郷喪失者のふるさと紀行」『釧路春秋』第10号、1973年。「白樺は残った 故郷喪失者のサハリン紀行抄」『釧路春秋』第11号、1974年。

⁵⁵ 前掲、荒澤『遙かなるサハリン 故郷喪失者のふるさと紀行』185頁。宮澤賢治『春と修羅』（1924年）から「樺太鉄道」「鈴谷平原」が引用されている。

⁵⁶ 石川澄水「樺太歌壇」『北海道歌壇史』北海道歌人会、1971年、421頁。

⁵⁷ 前掲、石川澄水「樺太歌壇」『北海道歌壇史』440頁。

海道新聞社,1983年)があり、作品を年代ごとに掲載し、人物や当時の樺太の状況も説明がされている。荒澤は同書について「詳細に記録されているので、蛇足を加える余地はない」とし、樺太の文学史での唯一の先行研究に挙げている⁵⁸。

樺太時代の荒澤の文学仲間の多くは、戦後もジャーナリストや文筆業に携わっており、自身の経験や小説化した作品を出している。樺太詩人倶楽部の代表者であった松尾朔雄は、樺太庁通信課の吏員から雑誌『樺太』の記者となり、合併後の『北方日本』では札幌支社に勤めた。1943年には同社から松尾の編著による『ソ連北樺太』を刊行し、この本が原因で終戦時にソ連軍に検挙され、1956年まで抑留された。戦後は札幌で酪農雑誌『デイリーマン』の編集長を務め、松尾正雄の名前で抑留の体験記『シベリアの鉄鎖』(国書刊行会,1983年)を刊行している。

荒澤、阿部悦郎と真岡中学校での同級生であった関口弘治は、樺太時事新聞の記者から樺太庁の森林主事に転職後も創作を続けたが、戦後は1955年まで抑留された。関口は『カラフト流民系譜』(無明舎出版,1981年)、『囚人護送車ストルイピン』(日本編集センター,1983年)を刊行している。

樺太詩人倶楽部の会員で「黒木川霊」の筆名で合同詩集『鴉』や『樺日』文芸欄に発表していた樺太庁吏員の泉友三郎は、「新庄成吉」の筆名で雑誌『樺太』に政治評論を発表し、戦後、ソ連軍占領下の行政に従事する。その体験は、新庄成吉『冬空の記録 南樺太抑留生活の報告』(札幌・川崎書店,1949年)、泉友三郎『ソ連南樺太 ソ連官吏になつた日本人の記録』(妙義出版社,1952年)、同『小説南樺太』(私家版,1977年)の刊行となった。このように、かつての文学仲間たちは戦中・戦後の体験記を発表しているが、戦前の樺太の日常生活で展開された文学や文化活動は描かれていなかった。

1983(昭和58)年11月、70歳の荒澤は、『釧路春秋』第20号に「自伝的な樺太文芸史」を発表する。表題のとおり、自分が関係した同人誌や仲間の紹介を中心としており、文学史編纂の端緒となる。翌1984年3月、釧路の同人誌『北海文学』55号から「樺太文学史」の連載が始まる。この連載が1986(昭和61)年3月から刊行される『樺太文学史』の原型となるが、単行本は連載時よりも人物の情報は多く、作品や記事の転載、写真が追加されている。1987(昭和62)年7月に最終巻『樺太文学史』第4巻が刊行された後も、同年10月発行の

『北海文学』65号に「樺太文学史(完)」が発表され、その「補遺」が1990年、1991年の2号にわたって掲載された。連載と単行本の出版が並走したのには、すでに病を抱えていたことが理由にあるのだろう。『樺太文学史』第4巻の脱稿直後に荒澤は入院している。

『樺太文学史』は、かつての仲間からの証言や、各地の知人の協力を得て、北海道立図書館や国立国会図書館などの公共機関、個人蔵書から資料を借り、樺太の出版物から当時の活動を再構成しており、個人の回想録を越えて、文学活動から描く樺太の通史となった。

同時期には『北方文芸』(1983年7月)186号から、木原直彦「北海道文学散歩」の樺太編の連載が始まり、『樺太文学の旅』(札幌・共同文化社,1994年)としてまとめられるが、同書が様々な作品での樺太の描写に注目しているのに対し、荒澤の『樺太文学史』は同人誌などの市井の文学活動や、北原白秋などの作家の来島では迎える側の住民の動向も記録されている。

荒澤は『樺太文学史』執筆の目的を初回で次のように述べている。

文学という比較的範囲の広い世界で若者たちは何をしたか、それに考えが及ぶと漫然としていることは、とても苦しいことに思われた。このままでは風化してしまう。その実体は故郷喪失と同様に埋没して、語り伝えられることもなからう。

鮭の下半身のような形態の北の島に「文学」があったことを書きとめて置くことは、その当時を知る若者としての責務の一つである。⁵⁹

『樺太文学史』には、夭折した文学仲間の作品も紹介されており、友人阿部悦郎の創作活動が詳細に記されている。また、棟居俊一長官時代の文化政策についても頁を費やし、樺太文化振興会で出された刊行物やその著者についても解説されている。書名の「文学」に限らず、樺太での出版活動や、雑誌・新聞記事を引用して、美術や演劇運動も取り上げており、1938(昭和13)年に病床の阿部悦郎へ勧めた「樺太文化小史」の案を実現させた内容といえる。

表紙には樺太叢書に使われた南樺太の変形したデザインが用いられ、中央にはコウエンタンポポが写し出されている。この花はエフデタンポポ、ロスケタンポポとも呼ばれ、荒澤にとって「樺太豊原市のわが家の南には原野があって、そこが橙赤色に染まった」という思い出深い花であり、また北海道には「戦後、樺太・千島方

⁵⁸ 荒澤「自伝的な樺太文芸誌」『釧路春秋』第20号、釧路文学団体協議会,1983年,40頁。

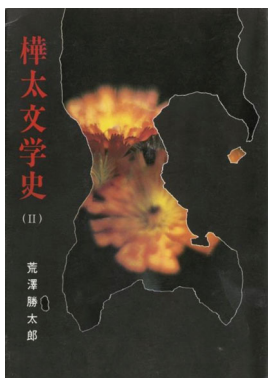
⁵⁹ 荒澤『樺太文学史』第1巻、艸人舎,1986年,405頁。

⁶⁰ 荒澤『釧路湿原の花』北海道新聞社,1986年,157頁。コウリンタンポポの解説文より。

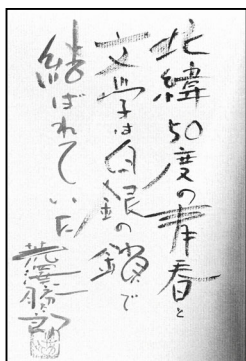
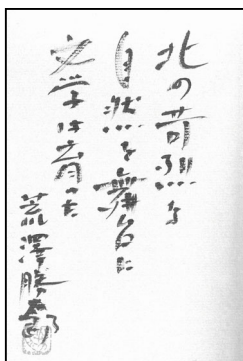
⁶¹ 荒澤『亜寒帯の花』北書房(札幌),1965年「はしがき」より。『亜寒帯の花』はシリーズ化し、1975年発行の第V集まで刊行された。

⁶² 船崎光治郎『図説樺太の高山植物 上』樺太叢書第5巻、樺太文化振興会,1941年。高山植物や樺太特産の植物133種の特徴、群生地解説、色刷のスケッチ画掲載、下巻は未刊。著者船崎は、樺太日日新聞記者で版画家でもあった。

面からの引き揚げ者たちと一緒に入り込んだ」という由来もあり、自身の生い立ちと重なる花でもあった⁶⁰。



『樺太文学史』は各巻500部発行され、個人への頒布の他、北海道を中心とした公共・大学図書館に寄贈されている。見返しには献呈詩が添えられた巻もあり、個人所蔵の同書には「北の苛烈な自然を舞台に文学は育った」「海峡に陽がおちた 鷗らは皆な帰った その後に詩があった」「北緯50度の青春と文学は白銀の鎖で結ばれていた」と書き込まれている。文学史を描くことへの思いが詩で表されているといえよう。



4. ハマナスの調査

戦後の荒澤の著作の大部分を占める自然文学の執筆活動も、樺太への郷愁が背景にある。荒澤は1964（昭和39）年4月から7月にかけて『朝日新聞』道東道北版に写真と随筆で構成された「釧路原野の花」を連載しており、翌1965年10月に連載100編をまとめて、文庫サイズの『亜寒帯の花』が刊行された。その自序は「私は釧路湿原を愛している。それは故郷の亜寒帯に似ているからだ」から始まり「人は釧路原野と呼ぶが、私には湿原と呼ばせてもらったほうが、親しめるし亜寒帯

的な特異な風土性があつてよいと思つている」と、樺太と共通した風景を感じさせる「湿原」や「亜寒帯」の表現へのこだわりを述べている⁶¹。草花の特徴についての参考文献には植物学の専門書とともに、樺太文化振興会から発行された『樺太の高山植物』⁶²もあげられている。

荒澤は、道東の自然についての随筆を『読売新聞』や地元紙『北海道新聞』『北海タイムス』からの依頼も受けて執筆し、同人誌『やち坊主同人会』でも発表する。これらの作品には、釧路や根室など道東での人々との交流とともに、樺太時代の記憶も呼び起こしている。

例えば、タンポポには、真岡町に残されたロシア帝国領時代の商人の墓碑周辺での群生を思い出し「中学校と目と鼻の先きであったので、私はエスケープしてこの原っぱで詩集を、また小説を読みふけた」⁶³ことや、コケモモ（フレップ）には、蘭泊村^{はぼまい}羽母舞原野での真岡中学校の軍事演習で「私には斥候に出されて、道々、フレップの実を積んでは頬張った甘酸っぱい記憶がある」⁶⁴と懐かしんでいる。

また、レンゲソウには、戦時中、鹿児島島の航空基地でトラックの移動中に空襲を受けて飛び降り「私はレンゲソウの花の中に身を伏せた。小さな紅紫色の花の集り、蝶のような形の花の集まりの中、私は、ここに春があることを痛切に感じた」ことから、自身の危険よりも「私はそのとき、亜寒帯の故郷を思い出していた。季節が二ヶ月も違うのだ。それははるかに遠い島である」と、そこで暮らす家族の姿を思い浮かべたという⁶⁵。渡り鳥のハクチョウにも、北海道と樺太と往来していることから「どうも感傷的になってしまうのだが、パスポートを必要としない白い大集団がうらやましい」⁶⁶と綴っている。

荒澤は、植物の中では特にハマナスの植生に注目しており、全国各地のハマナスの群生地を調査し、保護を訴えている。その発端は、戦後のサハリン訪問で、ホルムスク（旧・真岡町）南方の「旧羽母舞のソ連の療養所見学に行ったとき、その近くのシラカンバの疎林の中で、数株のハマナスと仲間のカラフトイバラに出会った。迷いこんだように、装ったように咲いていたのだ。その時は飛び上がって喜んだ」ことからであった⁶⁷。

樺太のハマナスは、オホーツク海に面した東海岸の^{さかえはま}栄浜周辺に群生地があり、チェーホフや柳田国男、宮澤賢治などの来島者により、その景色が描写されていた。荒澤には西海岸各地にも幼少期から樺太日日新聞記者時代にかけての思い出にハマナスの印象があり、ソ連領サハリンにあって当時の記憶を思い出させる花であった。

⁶³ 荒澤『花の釧路海岸線』やち坊主同人会,1972年,293頁。

⁶⁴ 前掲、荒澤『花の釧路海岸線』310頁。

⁶⁵ 前掲、荒澤『花の釧路海岸線』297頁。

⁶⁶ 荒澤『釧路湿原春夏秋冬』艸人舎,1977年,261頁。

⁶⁷ 荒澤『《日本列島》ハマナスの旅 ハマナスよ永遠に』艸人舎,1990年,209頁。

荒澤はその後、北海道各地の沿岸にあるハマナスの風景を取材する。その中には、稚内公園に建立された樺太の慰霊碑「氷雪の門」や真岡郵便局の交換手の慰霊碑「九人の乙女の碑」、留萌市の「三船殉難者慰霊碑」の周囲に移植されたハマナスや、取材先で知り合った旧樺太住民との交流もあった。

しかし、自然の群生地は、海岸の保全や河川の改修により失われつつあった。石狩川河畔では大輪を見つけて驚嘆したものの石狩湾新港開発現場の後背地であることから消滅が予想された。釧路でもかつて松浦武四郎が『蝦夷日誌』に記録した群生地が港の建設や市街地化により失われており、荒澤は「地方自治体の職員としてジレンマにおちいりながら」も調査を続け、退職後は全国の海岸線を「巡礼」する⁶⁸。

1990年7月、その調査を『《日本列島》ハマナスの旅 ハマナスよ永遠に』の自費出版でまとめており、タイトルの「日本列島」には「政治的な高度の時限での領土的な問題はさておいて、植物的には日本列島に南樺太を加えて、北の基点とすることは少しも差しかえない」という意図が込められた⁶⁹。

おわりに

1993（平成5）年1月、荒澤の「敗戦と樺太文学」を月報に掲載した『岩波講座 近代日本と植民地』第7巻が刊行される。この年の11月、80歳の荒澤は「釧路湿原を中心とした自然保護と啓発活動」の功績により、第47回北海道新聞文化賞を受賞する。受賞を伝える記事には「荒沢さんの作品が世に出回り、書店に並び始めると、湿原にあまり関心を払っていなかった釧路市民の意識も次第に変化し始めた。「釧路湿原」という固有名詞も市民権を得て、国立公園指定やラムサール条約登録の実現の原動力になった。」⁷⁰と顕彰されている。

翌年の1994年1月18日付『北海道新聞』朝刊に荒澤の随筆「間宮海峡の夕陽」が掲載される。そこには「私の生まれ故郷は、今は異国の街サハリンの真岡である。丘の一つから夕陽の間宮海峡を眺めていると、ついつい両眼が涙でくもってしまう」という回想から始まり「今、釧路の東海岸の段丘にたたずんで私は無感動に寄せてくる太平洋のうねりのリズムに酔って、遠い時代へトボトボと歩いて行くだけなのである。そこにはロマンの世界はないのだ」と、生涯を過ごした二つの土地の情景を自身の佇む姿で結び描いている⁷¹。この記事の掲載から3ヶ月後の1994年4月2日に荒澤は逝去した。

荒沢の創作活動における生涯の主題となった「郷愁」は、戦前だけでなく、戦後も釧路湿原やハマナスの

群生地などの北海道の自然が樺太を連想させ、その思いを留めた。そして、サハリン再訪による日本領樺太の喪失を受け止め、同時に文学作品にその風景を見つけた。

その発見は、かつて病床の友人阿部悦郎を励ますために提案した「樺太文化小史」を自ら編纂することにつながる。そこには、住民が築いた郷土文化を語り伝える歴史的な意義とともに、サハリンに代わり「郷愁」を向ける場所としての意味もあったのだろう。そのためには、自身と仲間たちの活動を振り返る資料や証言を集める時間が必要であり、晩年に至り『樺太文学史』へと結実させた。

その樺太への「郷愁」を創作活動として継続させ、作家荒澤勝太郎を育てた釧路の郷土文化もこの大著の編纂を支えた土壌といえよう。

（本稿は、2019年9月15日に釧路市中央図書館会議室で開催されたサハリン樺太史研究会第55回例会での同題の報告をもとに、資料を追加してまとめた）

謝辞

2018年11月の資料調査では、釧路市中央図書館・一般財団法人くしろ知域文化財団のご協力をいただきました。

同館に所蔵されている荒澤勝太郎の著作や『樺太文学史』の原稿、サハリン訪問時の写真などの閲覧が本稿作成につながりました。記して厚くお礼申し上げます。

⁶⁸ 荒澤『北海道ハマナスの旅』北海道新聞社、1978年、276頁。

⁶⁹ 前掲、荒澤『《日本列島》ハマナスの旅 ハマナスよ永遠に』222頁。

⁷⁰ 「道新文化賞 社会文化賞 著述業荒澤勝太郎さん釧路湿原広く紹介 国立公園指定の端緒に」『北海道新聞』朝刊、1993年11月3日。

⁷¹ 荒澤「好きな言葉 間宮海峡の夕陽」『北海道新聞』朝刊、1993年11月3日。